SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

文化を映し出すことば：日英比較から文化を言語学する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2016-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009308

文化を映し出すことば
—日英比較から文化を言語学する—[1]

大 村 光 弘

1 はじめに

私たちが普段なにげなしに用いている日本語だが、他文化・他言語と比較してみると、それまで意識することがなかった日本語らしさに気づくことがある。以下の議論では、主に語法の観点から英語・英語圏の文化と日本語・日本文化を比較し、そこから見えてくる英語らしさや日本語らしさが、両文化圏のものの考え方や国民性の違いを反映したものであることを明らかにする。

まず初めに、日本語の「溺れる」と英語のdrownを取り上げてみよう。日本語では、(1a)に対して(1b)のように、「溺れた」と言った直後に「が、近所の漁師によって無事助けられた」と言っても、意味的矛盾は生じない。

(1)a. チュンサンは湖で溺れた。
　b. チュンサンは湖で溺れたが、近所の漁師によって無事助けられた。

ところが英語の場合は、(2a)に対して(2b)のように、「溺れた 'drowned'」と言った直後に「近所の漁師によって無事助けられた 'he was saved by a local fisherman'」という表現を付け加えると、忽ち意味的矛盾を生じてしまう[2]。

(2)a. Joon-sang drowned in the lake.
　b. *Joon-sang drowned in the lake, but he was saved by a local fisherman.

---

[1] 近年、静岡大学主催の公開講座や高大連携講座（高等学校への出張授業）が始まり、そういった場で講師を務める際に、高度に専門的な理論言語学ではなく、一般向けの内容であるが言語学的な視点も盛り込んだ話をする機会が増えてきた。本稿は、そのような公開講座や出張授業で話した内容を論文形式でまとめたものである。

[2] (2b)の文中に使用されている星形記号「*」(アスタリスク）は、その文が非文法的であることを意味している。

この違いはどのような理由から生じるのだろうか。

結論を先取りすると、この違いは、ある出来事をどこまで単語の意味の中に含めるのかという点において、両言語間で事情が異なっていることに由来する。つまり、英語は出来事の結果まで語義の中に含める傾向が強いが、日本語は出来事の結果を語義の中に含めない傾向が強いのである。「語義の中に含めない」と言った場合、母語話者が(1a)のような発話を行った場合、問題となっている結果意味を全く意図しないと言っているのではない。実際、問題となっている結果意味は含意（implicature）として存在するのである。したがって、(1b)に示したように条件さえ整えば、含意であるが故に無効化（cancel）されるのである[3]。語彙化におけるこの違いは、両文化の対照的性質から生じた帰結であると主張することになる。

2　日本文化と欧米文化の特徴づけ[4]

文化はコミュニケーションにおいて直接言語化されないが、強い影響力を及ぼしている。このことを示すために、まず日本文化の特徴である「(民族的）同質性」、「垂直性（＝タテ型社会)」、「相互依存性（＝甘え)」、「点的思考」等の概念を考察してみたい。日本人は民族的同質性が高いため、構成メンバーの意識には多くの共通項が存在する。さらに、家庭、地域社会、会社といったそれぞれの場ごとに集団が構成されており、その場の中でタテ型の序列関係が形成されている。このような階層度の強い日本社会では、相互依存の人間関係が発達しており、そこでは個人よりも集団が強調され、個別的人間関係が絶対的人間関係に優先されることもしばしばある。言語コミュニケーションにおいては、コンテクストの多くが共有されていることから、言語コードを必要最低限に抑えた、きめの粗いコミュニケーションが特徴的である。さらに共有された言外の情報に依存しながら会話が進むため、言葉によって表現される部分（＝文）の間の連続性が失われ、総合的・点的・間的な思考パタンを取る傾向にある[5]。

島国国家ゆえの「同質性」を育んできた日本と対照的なのが、他民族・他文

---

[3] 含意が無効化される性質を持つことに関しては、Grice（1975：57）を参照されたい。

[4] この節の文化比較に関しては、石井敏・岡部朗一・久米昭元（2004：第２章）及び橋本義明（編著）(1997：第12章）を参考にしている。

[5]「総合的」とは、細部は抜きにして全体的・蓋然的に物事を捉える様を意味する。また、「点的」・「間的」とは、言葉によって表された部分（＝文）間で連続性や結束性が失われている様を意味する。

化との接触を繰り返してきた欧米の国々である。欧米の人々は、異文化間接触を通して「異質性」を意識してきたにちがいない。一国の文化的特徴として「異質性」を持つ国は、言うまでもなくアメリカである。そこでは人種、言語、慣習のどれをとっても「異質性」が際立っている。また、欧米社会一般に当てはまることであるが、キリスト教の影響から「人間は神の下に平等である」という信念が根差している。言い換えれば、欧米社会は「水平性（＝平等原理）」によって特徴づけられる「ヨコ型社会」ということになる[6]。また、欧米社会では、人が他人に対して愛情を求めたり、依存したりすることを強く抑圧する傾向が見られる。これは、対人関係を規定するファクターとして、「自立性」が存在するからである。これも相互依存的な日本社会と対照的な特徴である。「異質性」、「水平性」、「自立性」といった概念に根差した社会では、個人は別個人に対して率直に意見を述べ、意見が異なった場合は相手を説得しようとする傾向が強くなる。したがって、自ずと言語コードを駆使したコミュニケーションスタイルが発達するのである。このような社会では、日本的コミュニケーションスタイルとは対照的に、「分析的」、「線的」思考パタンをとる傾向が強くなる。そこでは物事を蓋然的・総合的に把握するのではなく、要素ごとに細かく切り刻み、分類・類型しながら分析する。さらに、相手をうまく説得するために、論理的且つ首尾一貫した論の展開が要求される。

ここで、日本文化と欧米文化について比較してきた内容を、表１としてまとめておくことにする。表１では、コミュニケーションスタイルに影響を及ぼすと思われる価値前提のなかでも特に、「社会・文化の本質についての価値前提」、「対人関係についての価値前提」、「思考パタンについての価値前提」の三点について、欧米文化と日本文化のもつ特徴をキーワードとして示している。

---

[6] ここでの「水平性」は現実に平等社会が成立しているということを意味しているのではなく、平等が建て前になっているということを意味している。

表1　欧米と日本の価値前提の違い

欧　　米	日　　本
◇社会・文化の本質についての価値前提	
水平性、異質性（特にアメリカ）	垂直性、同質性
◇対人関係についての価値前提	
自立／独立性、個人主義	相互依存性、画一主義
◇思考パタンについての価値前提	
分析的、線的	総合的、点的

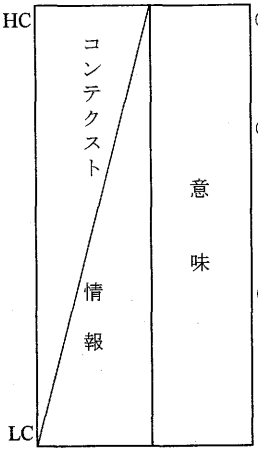
欧米文化と日本文化における価値前提の違いを概観したところで、文化と言語コミュニケーションの関係を論じたHall（1976）に言及しておくことは、これからの議論にとって有意義であると思われる。Hallは、ある文化のメンバーがメッセージの記号化と記号解釈の過程で、どの程度コンテクスト（物理的環境、社会的環境、心理的環境、時間的環境、非言語コード、対人関係など）を考慮するかに着目し、文化を「高コンテクスト文化（high-context culture）」と「低コンテクスト文化（low-context culture）」の二つに分類した。

（極端な）高コンテクスト文化では、話し手の意図（話し手が聞き手に伝えようとする意味のことで、図1では「意味」と表示した）の大部分が言外の情報（＝コンテクスト）として背景化されており、言葉によって表現される部分（＝情報）が極めて少ない。このような文化では「同質性」に基づくメンバー間の結束が強く、集団主義的傾向が観察される。また、伝統的に特定の行動規範が確立していることが多い。高コンテクスト文化では共有されている背景知識が豊富なので、言語コードに依存しないコミュニケーションの遂行が容易である。日本的コミュニケーションスタイルは、まさに高コンテクスト文化を代表するものである。

一方、（極端な）低コンテクスト文化では、話し手と聞き手の間で共有している前提が極めて少ないので、話し手は自分の意図を言葉によって伝えなくてはならない。このタイプの文化ではメンバー間の結びつきが弱いため、当然、変化に対する抵抗力も弱い。自ずと個人主義的傾向が観察される。言葉によるコミュニケーションにおいても、言語コードを駆使して意志を伝える傾向が強くなる。欧米（とりわけ、アメリカ）的コミュニケーションスタイルは、まさに

高コンテクスト文化を代表するものである。

図1　文化コンテクストと情報の相互作用



○コンテクスト
　物理的環境、社会的環境、心理的環境、時間的環 境、非言語コード、対人関係など

○HC（高コンテクスト）文化
・集団主義的傾向が見られる。
・変化に対する抵抗力が強い。
・伝統的に特定の行動規範が確立している。
・言語コードの使用が抑制される。

○LC（低コンテクスト）文化
・個人主義的傾向が見られる。
・変化に対する抵抗力が弱い。
・メンバー間で共有する前提が限定されている。
・言語コードを駆使して意志を伝える。

3「キッパリ型」対「ダラダラ型」～語法の問題として～[7]

この節では、日本語と英語の動詞を幾つか取りあげ、それぞれ高コンテクスト文化ならではの特徴と低コンテクスト文化ならではの特徴が観察されることを例証する。具体的には、出来事の結果部分まできっちりと語彙化する傾向が強いのが、低コンテクスト文化を代表する英語であり、出来事の結果部分を含意（＝文脈から推論される意味）として聞き手の解釈に委ねる傾向が強いのが、高コンテクスト文化を代表する日本語であると主張する。説明の便宜上、英語のような言語を「キッパリ型」言語、日本語のような言語を「ダラダラ型」言語と呼んで区別することにする。

3.1　出来事をどこまで動詞の意味の中に含めるのか

まず初めに、冒頭で取りあげた(1)(=(3))と(2)(=(4))をもう一度考察してみよう。(3b)と(4b)は全く同じ事態を表現しているにも拘わらず、日本語では文法的であるのに対して、英語では非文法的である。

[7] 3節の議論は、影山（2003）を参考にしている。

(3)a. チュンサンは湖で溺れた。
b. チュンサンは湖で溺れたが、近所の漁師によって無事助けられた。

(4)a. Joon-sang drowned in the lake.
b. *Joon-sang drowned in the lake, but he was saved by a local fisherman.

日本語の「溺れる」は、溺れた結果どうなったのかという部分がコンテクストに依存して推論される。したがって、(3a)において溺れて死んだという含意が生じることがあるが、(3b)の文脈ではこの含意が締め出される。英語の「溺れる 'drown'」は出来事の結果まで含めた意味（すなわち、「溺れて死ぬ」という意味）である。したがって、(4b)のように「溺れて死んだ 'drowned'」と言った直後に、「でも命が助かった」と言ってしまうと、意味的矛盾を引き起こすことになる。参考までに、(4b)に副詞almostを付け加えて(5)のように表現すれば、溺れて死にそうになった（すなわち、溺れて死ぬという出来事が完結しなかった）ことになり、意味的矛盾が解消される。

(5) Joon-sang almost drowned in the lake, but he was saved by a local fisherman.

つぎに、日本語の「説得する」と英語のpersuadeを比較してみよう。(6)は産経ニュースWeb版から引用した記事である[8]。

(6) 29日午後1時50分ごろ、埼玉県飯能市岩渕のみどり橋で、「男性が橋の上から飛び降りようとしている」と通行人から110番があった。飯能署員7人が駆けつけたところ、男性が橋の欄干（高さ約1.1メートル）を乗り越えて立っていた。署員は「話をしよう」などと声をかけて説得したが、約1時間後、男性は橋から約20メートル下の成木川の河川敷に飛び降り死亡した。

（産経ニュースWeb版、2009.6.29）

この記事の最後の一文に「…説得したが…死亡した」という記述があるが、そこに意味的矛盾は感じられない。

[8] 参照しやすいように、記事の中の「説得した」の部分に下線を施した。

英語での状況は一変する。(7b)のように、「警官はその男性が橋から飛び降りないように説得した」の後に「が、その男性は橋から飛び降りて死んだ」と付け加えると、忽ち意味的矛盾を引き起こしてしまう。

(7)a. The police officers persuaded the man not to jump off the bridge.
b. *The police officers persuaded the man not to jump off the bridge, but he did and died.

persuadeの意味は「人を説得して考えを変えさせる」である。すなわち、説得行為の結果部分も語彙化されているのである。したがって(7a)の正確な意味は、「警官はその男性を説得して橋から飛び降りることを思い止まらせた」となる。当然のことながら、(7b)のように「説得して橋から飛び降りることを思い止まらせた」と言った直後に、「が、その男性は橋から飛び降りて死んだ」と言ってしまうと、意味的矛盾が生じてしまうのである。

日本語の「説得する」という動詞には行為の意味のみが語彙化されており、説得行為の結果部分は、文脈に依存して理解されると考えられる。したがって、「警官が男性を説得したにも拘わらず、男性は橋から河川敷に飛び降りて死んだ」と言っても、意味的矛盾は生じないのである。

因みに、英語の場合、(7b)の文を(8)に示したように修正すると、(5)の場合同様意味的矛盾が解消する。

(8) The police officers tried to persuade the man not to jump off the bridge, but he did and died.

今やこの理由は明白である。「説得しようと試みた 'tried to persuade'」として出来事が未完結となっているので、後半部分で「が、男性は橋から飛び降りて死んだ 'but he did and died'」としても意味的矛盾が生じないのである。

つづいて「閉める」とcloseについても考察してみよう。(9a)は日本語として不自然な文であるが、非文法的と判断するほどではない。因みに、(9a)に「一生懸命」や「力いっぱい」といった努力を表す副詞をつけてみると、(9b)のように不自然さがかなり解消してしまう。

(9)a. ?チュンサンはドアを閉めたが、完全に閉まらなかった。

b. チュンサンは一生懸命／力いっぱいドアを閉めたが、完全に閉まらなかった。

「一生懸命」や「力いっぱい」という表現は動作に精出していることを表すので、ドアを開ける行為の方に注意が向けられ、結果状態（＝ドアが閉まったこと）が潜在化するためだと考えられる。行為の結果を語彙化していると想定される日本語の「閉める」のような動詞であっても、(9b)のような文脈においては、結果意味の部分が希薄化してしまう。それが日本語という言語なのである。

(9a)に対する英語の文は(10)であるが、but以下の文脈を付け加えると、当然の結果として意味的矛盾を引き起こす。

(10) *Joon-sang closed the door, but it was partly open.

さらに日本語とは異なり、(11)のように「一生懸命」にあたる副詞hardを付加することもできない。

(11) *Joon-sang closed the door hard.

副詞hardは行為を修飾するのであって、行為の結果状態は修飾できない。英語の動詞closeのように、結果状態が堅固に語彙化している（別の言い方をすれば、結果状態が強調されている）動詞は、hardを用いて修飾できないのである。

3．2　移動概念に関わる語法の違い

この節では、日本語の「歩く」、「泳ぐ」と英語のwalk、swimという移動（の様態を表す）動詞の語法を考察する。そうすることで、出来事の結果意味の明確化という点における両言語の違いを明らかにする。さらに、その違いが「ダラダラ型」対「キッパリ型」の類型から導かれることを論証する。

まず初めに、walkとswimを用いた英語の例文から始めよう。(12)と(13)では、これらの動詞と共に、移動の到着点を表す表現（すなわち、to Chuncheonとto the lake shore）が用いられている。

(12) Joon-sang and Yujin walked to Chuncheon.

(13)　Joon-sang swam to the lake shore.

(12)と(13)を直訳した日本語が(14)と(15)であるが、これらの日本語はぎこちなく、不自然である[9]。

(14)　?チュンサンとユジンは春川に歩いた。

(15)　?チュンサンは湖岸に泳いだ。

因みに、(14)と(15)をそれぞれ(16)と(17)のように言い換えれば、日本語として自然な表現となる。

(16)　チュンサンは湖岸に泳ぎ着いた。

(17)　チュンサンとユジンは春川に歩いて行った。

何故、英語では1つの動詞に到着点を表す前置詞句（to Chuncheon/to the lake shore）を付加するだけで文ができあがるのに、日本語では同じ状況を表現するのに「泳いで、湖岸に着く」、「歩いて、春川に行く」と言わなくてはならないのであろうか。別の言い方をすれば、なぜ英語では、swimやwalkに到着点を表す前置詞句を付加するだけで［移動＋到達］を表現できるのに、日本語では、別に到達を意味する動詞を複合させないと［移動＋到達］を表現できないのであろうか。

---

[9]「に」の代わりに「まで」を用いると自然な日本語になる。
(i) チュンサンとユジンは春川まで歩いた。
(ii) チュンサンは湖岸まで泳いだ。
ここで注意しなくてはならないのは、「～まで」は到着点を表すと言うより、移動した範囲（長さ）を表すということである。「～まで」が移動した距離を表す表現と共起している(iii)と(iv)は、このことを支持している。
(iii) チュンサンとユジンは春川まで20km歩いた。
(iv) チュンサンは湖岸まで500m泳いだ。
また、活動を表す動詞「読む」が「～まで」と共起することはあるが、「に」と共起できないという事実からも、「～まで」は（活動の及ぶ）範囲を表し、（到着点を表す）「に」とは異なった機能を果たしていると言える。
(v) チュンサンは本を1頁から50頁まで読んだ。
(vi) *チュンサンは本を1頁から50頁に読んだ。

前節で見たように、「キッパリ型」の英語は出来事の結果まできっちりと表現しようとする傾向が強い。したがって、移動と到達はお互いに親和的概念であり、意味的結合が容易であると考えられる。これに対して、「ダラダラ型」の日本語は、出来事の結果まできっちりと表現し、メリハリをつけることを拒む傾向が強い。したがって、「泳ぐ」や「歩く」は継続的動きを表現するのみに止まり、移動と到達という2つの概念が意味的に結合しづらい状況になっている。結果として、(14)や(15)のように、移動動詞に到着点を表す表現を付加しただけでは、意味的な安定感を損なってしまうのである。

4「キッパリ型」対「ダラダラ型」～場に適した表現方法の問題として～[10]

4.1 視点

これまで、高コンテクスト文化である日本文化において、そこで用いられる日本語に「ダラダラ型」の性質が観察されるのに対して、低コンテクスト文化の反映である英語には「キッパリ型」の性質が観察されることを見てきた。本節では、「視点」(「わたし」に視座を据えて表現するのか、「あなた」に視座を据えて表現するのか）という観点から、日本語と英語の違いを論じる。「わたし」に視座を据えた表現方法では、物／情報の出発点に視点が置かれているのに対して、「あなた」に視座を据えた表現方法では、物／情報の到着点に視点が置かれている。これは、日本語・日本文化が結果を重視しないのに対して、英語・英語圏の文化が結果を重視することの一例として考えることができる。

まず初めに、(18)と(19)に示した日本語の表現から議論を始めよう。

(18)　ほしいなら、(わたしは）その本をあなたにあげましょう。

(19)　(わたしは）おつりはいりません。

(18)において、本をあげる行為の主体は話し手である「わたし」である。同様に、(19)において、おつりを受け取る権利を放棄している主体も、話し手である「わたし」である。同じ内容を英語で表現しようとすると、それぞれ(20)と(21)のようになる。すなわち、自然な英語の表現としては、聞き手である「あ

[10] 4.1節の議論は、影山（2003）を参考にしている。また、4.2節と4.3節の議論は、松岡（2001）を参考にしている。

なた‘you’」を行為の主体として表現するのである。

(20)　You can keep the book if you want.

(21)　You can keep the change.

因みに、(18)と(19)をそれぞれ(22)と(23)のように表現して、「わたし」を行為の主体として表現することもできるが、恩着せがましいニュアンスが加わり、場に適した自然な表現ではなくなってしまう。

(22)　I'll give you the book if you want.

(23)　I'll give you the change.

このように、日本文化・日本語では、発言や動作をする話し手（＝「わたし」）の立場から目標（すなわち聞き手（＝「あなた」）を捉えているのに対して、英語圏・英語では、話し手から聞き手に一方通行なのではなく、心理的に聞き手（すなわち、目標＝到着点）の立場に立って自分自身を見ていることがわかる。

この文化差は、(24)や(25)のような表現の違いにも表れている。

(24)　おかけになってください。医師がすぐに参ります。

(25)　Please be seated. The doctor will be with you in a moment.

日本語では、医師が患者（＝聞き手）の所にやって来るという過程として表現されているが、英語では、医師が患者の所にやって来た結果状態が表現されている。仮に、日本語で(26)のように表現したとしたら、非常に不自然な言い方になってしまう。

(26)　おかけになってください。医師はすぐにあなたと一緒にいます。

これらの事実は、日本語・日本文化が結果を重視しないダラダラ型なのに対して、英語・英語圏の文化が結果を重視するキッパリ型である所以である。

4.2　帰属（所有）意識のちがい

つぎに、帰属（所有）意識の違いに焦点を当て、日本語と英語の表現方法の違いを扱う。これまでは、出来事の過程と結果という観点から両言語の様々な振る舞いを観察してきたが、これ以降の議論では、どれだけ直接的に、率直に、客観的に、具体的に表現するのかという観点から、日本語と英語の表現方法を比較・分析する。帰結として、高コンテクスト文化らしく、主観的に、曖昧に表現しようとする日本文化・日本語と、低コンテクスト文化らしく客観的に、具体的に表現しようとする英語圏の文化・英語というものが見えてくる。

英語では、言葉によって厳密な所有関係を表現する傾向が強い。たとえば、妻が同席した席で私が息子を人に紹介するとき、(27)のように言うのが普通で、(28)のように言ったとしたら、同席しているのは再婚した妻だと解釈されかねない。

(27)　This is our son.

(28)　This is my son.

日本語であれば、どちらの所有格代名詞を用いても、通常そのような含意が伝わることはない。さらに、所有格部分を省略することさえ出来る。高コンテクスト文化を反映する日本語ならではの振る舞いである[11]。

(29)　これは（家の／わたしの／わたしたちの）息子です。

日本だと、肉親でも義理でも親である限り、「おかあさん」、「おとうさん」と呼びかける。このことは英語圏の文化に当てはまらない。Mother/Mom、Father/Dadという呼びかけは実母や実父に限られる。義理の親はいくら親しくても他人であるという意識が強いからであろう。仮に、私が妻の両親を英語で紹介するとしたら、(30)のように「義理の父（father-in-law）です」とか「義理の母（mother-in-law）です」といったような表現を使うことになるが、英語圏では

[11] 日本語には謙譲語、尊敬語があるので、自分の息子を言及するときは謙譲語の「息子」を使い、他家の息子に言及するときは「お坊ちゃん」、「御子息」、「息子さん」などを用いる。所有格の形で所有者を明示しなくても、人や物が誰に属しているのかを示すことができるからである。タテ型社会の中で発達した敬語システムの存在が大きい。

そのような表現は義母・義父に対して失礼に当たらない。

(30)　This is my father-in-law/mother-in-law.

両親が離婚して、どちらかが再婚し継父あるいは継母ができると、英語圏の子どもは彼らをファーストネームで呼ぶのが普通であるが、人に紹介する場面では、(31)のように、「私の継父（step-father）です」とか「私の継母（step-mother）です」と言うかもしれない。そのように紹介したとしても何ら不自然、不適切な表現ではない。

(31)　This is my step-father/step-mother.

日本で「義理の父です」、「義理の母です」、「継父です」、「継母です」のような言い方をしたら、非血縁関係に重点を置くように響いて、非常によそよそしく聞こえてしまうし、紹介された人達も日本の習慣に馴染まない表現に驚いてしまうかもしれない。

以上のように、日本文化は高コンテクスト文化であるが故に、個別的な人間関係やその他の文脈に依存して、主観的に、曖昧に表現する傾向が強いが、英語圏は低コンテクスト文化であるが故に、絶対的な人間関係や個人主義に基づいて、言語を用いて率直に、客観的に、具体的に表現する傾向が強いことが分かる。

4.3　美を心で感じる日本語と、具体性を好む英語

筆者が大学の授業で、(32)を英語で何と言うのか受講生に質問することがある。

(32)　静大のことどう思う？

受講生の所属学部にもよるのだが、あるクラスでは8割近くの学生が(33)のように解答したことがあった。

(33)　How do you think about Shizuoka University?

本来ならば、(34)のように答えるのが正解である。

(34)　What do you think about Shizuoka University?

学生達が(33)のように答えた原因は、日本語の「どう 'how'」に影響されたからに他ならない。同じ事を尋ねるのに、日本語ではhowに当たる「どう」を用いて、英語では「何」に当たるwhatを用いるのは何故だろうか。ここでも、言語を用いて客観的・具体的内容を引き出そうとする英語と、そのような性質の情報ではなく、聞き手の感情的・感覚的反応を求める日本語との文化差を垣間見ることが出来る。

日本人にとっては、理論的な長い説明や抽象概念よりも、物事を心で感じる事の方が古来から重要視されてきた。文学では感情を短い字句で表す短歌や俳句が発達したし、美術では心の目で一瞬を描く禅画、写楽などの俳優の見得を写す浮世絵版画などが発達した。また、人間の感情を細やかに描写した日記文学や、情緒豊かな物語文学、感想などを多く含む随筆も発達した。さらに、「わび」、「さび」といった物悲しさを言いあらわす概念が、日本文化の中に脈絡と生き続けている。

英語圏の人々にとっては、情緒的反応よりもむしろ何か具体的な情報を得ることが重要だと思われる。その証拠に英語圏では、小説、有名人の伝記、特殊な経験を積んだ人の回顧録、ある事件の詳細な記録など具体的、客観的に表現されているジャンルが発達している。

以上のように、日本文化は高コンテクスト文化であるが故に、主観的、感覚的、総合的に物事を捉える傾向が強い。一方、英語圏は低コンテクスト文化であるが故に、客観的、具体的、分析的に物事を捉える傾向が強いといえる。

5　まとめ

本稿では、日本文化と英語圏の文化がそれぞれ、高コンテクスト文化（文脈依存度が高く、言語コードの使用を極力避ける文化）と低コンテクスト文化（文脈依存度が低く、言語コードを駆使する文化）に属すると考え、それぞれの文化類型を反映するものとしての日本語と英語の違いを扱ってきた。日本文化は、「(民族的) 同質性」、「垂直性（＝タテ型社会)」、「相互依存性（＝甘え)」、「点的思考」といったキーワードによって特徴づけられる文化であり、曖昧性を好み、

ケジメを拒む「ダラダラ型」言語であると論じた。一方、英語圏は、「(民族的)異質性」、「水平性（＝ヨコ型社会)」、「自立性」、「分析的」・「線的」思考といったキーワードによって特徴づけられる文化であり、具体性・客観性を好み、ケジメを好む「キッパリ型」言語であると論じた。

参考文献

Grice, H. Paul (1975) "Logic and Conversation," in *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, ed. by Peter Cole and Jerry L. Morgan, pp.41-58, Academic Press, New York.

Hall, Edward T. (1976) *Beyond Culture*, Anchor Press, NY.

橋本義明（編著）(1997)『コミュニケーション学への招待』，大修館書店，東京.

石井敏・岡部朗一・久米昭元（2004)『異文化コミュニケーション』，第13版（1987年初版)，有斐閣，東京.

影山太郎（2002)『ケジメのない日本語』，岩波書店，東京.

松岡陽子マックレイン（2001)『英語・日本語コトバくらべ』，中央公論新社，東京。